

No. 12 「ヤバイ」と「エモい」しかないの…？！

最近、わからない言葉がずいぶん増えてきた気がする。なんとなくわかっているツモりで使われている、横文字のことだけではなく、日常でごく普通に耳にする言葉の数々。特に「略語」には、想像のつかない単語が多過ぎる。まあ、何年も前に「化石の日本語」と言われた私の言語能力のせいかもしれないけれど。新しく編集された辞書には、取り上げられているものもあるらしい。

毎年本当に多くの流行語が生まれ、その中で消えていくもの、残るもの様々だ。

この日本独特の文化、誰が生み出すのかしら。仕掛け人がいるのかしら。恐らく今は若い人たちの間で、まず仲間うちだけの言葉や表現が生まれる。SNS などを通じて広がり、そこに乗っかったり迎合したり、受けを狙ったりする「上の世代」の人たちもいる。そして TV などのマスメディアや公の場でも使われ始め、私なんかは、フムフムとわからなくても聞き流す以外にない言葉も多い。

その一方で、「肅々と」とか「遺憾」とかの妙な「永田町専門用語」は、いまだ廃れずに生き延びている。あまりにも実感と心の伴わないこれらの「専門用語」、なぜわかりやすい”普通“の言い方ができないのかしらね、と毎回のように不思議に思う。そして、この人たちは、今流行りの「ヤバイ」とか「エモい」などの言葉を使うことはあるのかしら、とも。

45年以上前に初めてヨーロッパに行ったが、例えばドイツ語。もちろん少しは新しい表現が出てきていて、若い人たちの使う言葉で定着するものあり、しないものあり。

でも基本的に社会の中では、私が習ったドイツ語で十分理解できるし、皆が話している言葉も、TV で聞く言葉も、昔とほとんど変わりが無いのだ。新しく生まれて定着した言葉の例は、携帯電話を表す「Handy(ハンディ)」、古いものでは「スーパー」。この「スーパー」は日本語の「チョースゴイ」「チョーステキ」といった感じに当てはまり、世代を超えて、見事にいつでも何にでも使われる。

そうそう、私の実家に遊びに来た若いドイツ人のピアニストと私の会話を、同席していた両親が、小耳にはさんだ。そして私に尋ねた。「彼女、そんなにスーパーに行きたいの？ 何を買いたいの？」「スーパー」だけははっきりと何回もよく聞こえたのだ。

両親にとっては「スーパー」は「スーパーマーケット」のこと。“通訳”の私は初めはきょとんとしたが、だんだん意味が分かって爆笑。

もしかしたら私たち日本人は、新しい言葉を生み出す天才なのかも！？外国語を取り入れ、それさえも省略して使いこなす。今の若い世代の人たちは、言葉もその「物体」も知らないと言われるワープロ。この機械が出だしたころ、ドイツにいた私は、その便利さの噂を耳にした。そして、それは「ワープロ」と言うらしい。

おそらく省略語だろうとは思ったが、本当の名前は見当がつかない。ものすごく頭を悩ませた。もしかしたらドイツでも購入できる品かと思って探し回った。

ドイツの知り合いやお店で、一生懸命その機械の機能を説明すると、それはコンピューターだと言われた。いや、違う。そんなに複雑なものでなく、タイプライターが進化したくらいの感じで、と言っても誰も理解してくれなかった。さてさて、ワープロとは何だろう、とドイツの友人たちと頭を絞った。最終的にひねり出したのは、「ワールド・プロフェッサー」。だって何でもすぐできる機械らしいのだもの！これが40年近く前のことだった。大きなコンピューターは存在しても、「パソコン」なんてまだまだ一般的ではなく、ノートパソコンが出回るのももう少し後になる。

日本では本当に誰でも知っている言葉、「アルバイト」。もともとはドイツ語で、単に「仕事」の意味だ。母からドイツの家にかかってきた電話に、トルコ人のお手伝いさんが受話器を取った。私は歌劇場に「仕事」に行っていた。片言のドイツ語しかできなかつたおばさんは、母に言った。「ユミコ、アルバイトン」。私が不在とわかつた母は、その後再度電話してきて、「あなた、ちゃんとお仕事しているはずなのに、いったい何のアルバイトをしているの？」。今は全く聞かなくなつたが、「とらばーゆ」という言葉が、雑誌とともに流行つたこともある。なぜか「転職」という意味で使われたこの言葉も、実はフランス語で「仕事」…。いったい誰が作り出したのだろう！

生まれては消え、また新たに不思議な言葉が流行る。ナントカ・ソムリエ、なんてわけのわからないコンビネーション言葉もある。メタボも日本語です。外国の人は誰もわかりません。

そして今、ほとんどどんな場合にも発せられる単語、「ヤバい」。昔からあつた言葉で、きちんとした時代的な説明もある。私の若いころには絶対的に否定の意味で、なおかつ男性の、それもあつた種の特種な響きがあつた。

だから、自分ではどうしても口に出ない。オナカがもぞもぞする。しかたない。無理することもないだろう。

一方、「エモい」。ある意味、とても天才的な感じでもある。なんとも表現できない気持ちを、一言で表す。最近、「エグい」も時折聞かれるが、ずっと残る言葉になるだろうか。

いいのです。便利だし、私はこれらの言葉を否定する気はないけれど、でもこれだけで終わってしまうのは、ちょっともったいないなあ、と思う。試しに、これらの言葉に含まれる意味を思って、他の言い方をしてみようとすると、本当に数えきれない色々な表現が見つかるはずだ。

「エモい」。心が揺さぶられる、胸が熱くなる、とても感動する、涙がこぼれる、感銘を受ける、心が震える、などなど「エモーション」が引き起こす感情の表現の可能性のあるのに、全部「エモい」で終わらせる？ 美しい日本語を持つ我々、日本人としては残念ではないかしら。

いいのです、使っても。色々な可能性の一つとして選択して使うのなら、すばらしいけれど、なんとなく頭がナマケモノになっていくような感じを受けるのは、私だけだろうか。メンドクサイから、カッコいいから、流行っているから、一つだけで済ませてしまう？ 自動的に使っているうち、その言葉だけしか自分の語彙の中に残らなくなってしまうのは、もったいなくはないかしら？

同じ意味でもったいない、と思うのは、「鼻濁音」があまり聞かれなくなったことだ。

鼻濁音で発音した方が、「美しく」聞えるときもあるのに。濁ったスープか、澄んだスープか、くらいの差が感じられる。歌を歌う人は、結構無意識に「鼻濁音」を使って、ニュアンスを出しているかもしれない。

使わなくても構わない。でも、「使える可能性」を知っておくことで、日本語が豊かになるはずと思う。ちょっと試してみてください！

個人的には、今すごく流行っている「ハヤッ！」とか「すごっ！」とかいう言い方は好きではないし使えないが、これらを使う人たちは「原型」を知っているし、なんのために使っているかもわかっているから、大丈夫だろう。ムカシは「すっごーい！」とか「はっやーい！」と言っていたものが、短縮されただけですね。また原型に戻るかもしれないし。

「あっざーす」という言葉を聞いたときは、かなりな衝撃だった。何の意味だか全く見当がつかなかった。でも自分で小さく口にしてみて分かった。「ありがとうございます」なのね。口の中で何となく恥ずかし気にもごもごして、舌をナマケモノにして、アクセントのつくところだけを響かせる。誰が

初めて言い出したのか、大変興味がある。お相撲さんだろうか…？！

ところで、省略。アムス、デュッセル、ザルツ、なんて言われるのを耳にしたその国の人たちは、不快に思うらしいのだ。侮辱されたような、バカにされたような気がする。もしかしたら、彼らが日本の都市の名前を「短く省略」して喋っても、慣れっこになっている私たちは気にならないかもしれないが、彼らはイヤなのですって。「そうする意味が分からない！」とよく言われた。多分、長い名前を全部言うのがめんどくさいのと、“ツウ”っぽく聞こえるせい？ それ以上の深い意味合いは全然ないはずなのだが。アメリカで、「ロス」と言う人たちはいるのかな。

「こちら、ビールになります」

「え、今は何なの？」

「ハア？」

「だって、これがビールになるのではなくって、これビールなんですよ？ お客様、ビールです、ビールでございます、が正確でしょう？」と日本語を学んで来日したドイツの友人が、居酒屋のウェイターの日本語を直していた話で、終わりにしよう。

あ、もうひとつ。最近の敬語の異常さ。「患者様」もかなり変だが、「犯人のカタ」には目を白黒。極め付きは、最近のニュースで聞いたイノシシの捕獲。光景を見ていた近所の住民の話。「怪我をされていたようで」ですって。